

詠 詠 集

八月号



花鳥諷詠[®]



令和3年8月 ■ 第401号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	稲畑 汀子 2
	井上 泰至 4
虚子研究 『六百五十句』研究 (19)	7
虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十五)	
明治二十五年四月二十九日虚子宛池内政忠書簡 (封書)	
.....	黒川 悦子14
子規と漱石と私 20 病床の話題	18
新刊紹介	19・28
一頁の鑑賞.....	池田雅かず20
	吉田 有子21
この人の作品	大和田博道22
卯浪	23
風報	25
<hr/>	
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

春愁や挫折を糧と思ふまで

香川 福家 市子

虫博士植物博士子供の日

高知 岡林 知世子

惜しみなく散り惜しまれて散る桜

福山 久保 紘子

ポケットの無くなつてをり更衣

伊賀 永井 二紗子

この辺り富の風吹く小判草

高松 大山 孝子

二句短評

一句目——何か判らないが、挫折と思うような事柄に遭遇した作者。その時はがっかりして心傷めていたの
であろう。少し落着いて時間が経つと、挫折したことを糧として立ち直ることが出来て元気が出た様子が想像される。心情の推移が見事に語られた心の深い一句となつた。

二句目——子供の日である。子供たちと昆虫のことや植物の話が弾んだのであろう。子供たちもそれぞれ自分の知っていることを元気に話している様子が想像される楽しい一句である。

入選六十句

山桜地図を片手に探す墓 高知 坂本喜代子

咲いた日にもう落ちてゐる玉椿 鯖江 山岸世詩明

醜草に紛れず都忘れかな 七尾 坂下 成紘

落城も美学の一つ草おぼろ 天理 松田 吉上

日に一度日を浴ぶ慣五月かな 小平 青木美代子

初蝶や淡きひかりとなりて舞ふ 野々市 辻 文江

曇りても五月の空の明るさよ 小樽 高山タミ子

それぞれに良き名を持ちて薔薇香る 阿南 かつせ千津

歳月は土蔵と共に大桜 金沢 八百 恵子

播粉木は夫の手作り木の芽和 米原 成宮 伯水

句仲間と一つのこころ虚子忌日 浜田 福本 正嚴

歩く癖父に似て来し瓢の笛 朝倉 浅川 走帆

花吹雪浴びて卒寿の誕生日 大牟田 石橋 武子

図書館に新刊並び燕来る 高知 沢田 佳代

虚子のこともつと知りたく来し虚子忌 福岡 馬場 紀子

保護されし子猫の未来案じ抱く 堺 徳澤 彰子
 春惜む遊び足らざる思ひかな 姫路 黒田千賀子
 新緑が暗さを加へ始めたる 久留米 野口 桂子
 新緑へ踏み入る息を整ふる 大牟田 鹿子生憲二
 葉桜の空を騒がし風渡る 倉敷 小幡 恒雄
 くつろぎに程良きベンチ蚊にさされ 福山 広川 良子
 句の縁ともに万朶の花の下 弘前 藤田 豊子
 春の野に放り出されし子らの声 福山 佐藤 浩子
 それぞれの暮し守りて夏に入る 神戸 玉手のり子
 夕立の洗ひ上げたる夜風かな 埼玉 新井あい子
 どの服も兄譲りなり昭和の日 高松 森本 添水
 はきはきと自己主張して入学す 名古屋 内藤 信子
 叶はざる虚子忌へ庭の椿切る 長野 鈴木しどみ
 菜園に見えて隠れて夏帽子 厚木 黒山 敏恵
 つつましく暮らすわれにも新茶かな 大津 上野 滋子

一山を統べる泰山木の花 成田 川名部さと志
 春愁の句ばかり浮かぶ日なりけり 高山 原田 尚子
 遠くより母と分かりし春田かな 姫路 谷 春葉
 面会に通ふ近道花は葉に 福岡 梶原 敏子
 葉桜の道行く誰も見上げざり 洲本 高田 菲路
 六万の雁翔ち沼の淋しかり 札幌 岩本 京子
 口惜しさに声も無きかな根切虫 高知 和田 和子
 薔薇園の百万本の真昼かな 京都 西尾 善一
 転んでも笑顔で立つ子春の風 神戸 田中 順子
 呼びにきて母も摘み見る紫雲英かな 福岡 山口 裕子
 捗りしことに励みて草を引く 伊賀 北村 みち
 けふの雨きのふの新樹ぬりかへて 岡山 伴 明子
 羽化をする蝶の如くに更衣 鳥原 三好 勝利
 留守番の一人で出来て花は葉に 鳥原 八木 花栗
 開花せしばかりに雨の大牡丹 伊万里 達 信子

● 井上泰至選

特選五句

青嵐自在に使ふ車椅子

北海道伊藤 ていこ

ぼうたんの風を重たくしてをりぬ

八代山下 さと子

一片の落花となりて夫逝けり

長岡笠原 佐千子

鯉幟風の高さを未だ知らず

みやま松尾 光恵

山法師白とは風に錆びやすし

大牟田介弘 紀子

二句短評

一句目——中七は報告めいて一工夫必要かもしれないが、素材が新鮮。「青嵐」で、「軽やかさ」と「驚き」だけでなく、「健気さ」が出た。この季題にそういう「感じ」を呼び起こした意味でも清新。

二句目——以前、「八重桜」と「夜空」をこの形で詠んだ句に接したが、こっちの方がいい。難しい「風」という素材も、散々詠まれてきた「ぼうたん」もきっちり目に浮かんでくる。動きを見事に捉えた。

母の日や母に似てきし我が立ち居	松江	三浦	純子
快晴の風に色あり囀れり	浜松	鈴木	浜子
計画は幾たび流れ花は葉に	鳥取	宮脇	典子
また一年たたみ直して花衣	札幌	齊藤	和加
花は葉に季節ばかりが先を行く	伊賀	藤井	光子
みよし野は今年も遠し西行忌	神戸	宮田	マスコ
予告なく五月の梅雨のはじまりぬ	岡山	荒木	絹江
一面の落花にもある余情かな	大津	伊藤	薫
出来ぬこと増えてゆく日々花は葉に	西予	武知	洋子
師を偲ぶ途切れ途切れの草笛に	福山	早間	幸枝
青田波ドア半開き直売所	小諸	丸山	ま美
白き花真白き雲や夏来る	加古川	岩城	久美
うとうとと夢続きある大朝寝	佐賀	松丸	昭子
観客の戻り夏場所活気付く	岡山	山口	喜代子
焼べ足して引き止められてゐる夏炉	小樽	遠藤	嶺子

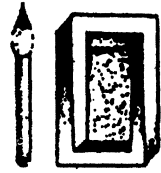
入選六十句

吊橋に止まりても揺れ風薫る 松山 高橋 草天
 咲いた日にもう落ちてゐる玉椿 鯖江 山岸世詩明
 みどり児のまるまるとして更衣 北九州 篠原 綾野
 迷ひ来てまむし注意とあるばかり 高松 金沢 正惠
 畝ごとに小さき名札の苗代田 高槻 林 曜子
 花吹雪浴びて卒寿の誕生日 大牟田 石橋 武子
 まづ大碑仰ぐことより虚子忌日 春日 永利五十鈴
 新緑へ踏み入る息を整ふる 大牟田 鹿子生憲二
 それぞれの暮し守りて夏に入る 神戸 玉手のり子
 思ひ出の小さき筥あり桜貝 吹田 河辺さち子
 行く所行きつく処新樹光 鳥原 柴田ちぐさ
 叶はざる虚子忌へ庭の椿切る 長野 鈴木しどみ
 置きくれし筍誰の好意やら 福山 池上 幸子
 祝事の着物をたたむ春の暮 富士吉田 鈴木 文代
 末っ子は小さな赤よ鯉幟 京都 奥田まゆみ

実となりし梅の静けさありにけり 阿南 湯浅 芙美
 歩を足していぬふぐりの野どこまでも 高松 佐々木 新
 桐咲いて遠嶺は青くなりけり 富山 高城 玲子
 夏足袋や娘長唄嫁歌舞伎 尼崎 ほりもとちか
 暫くはぬるき風くる扇風機 鳥原 高比良映子
 奥志摩の潮路に春を惜みけり 名張 奥田美代子
 自転車の一本道や新樹晴 東京 岩村 恵子
 舌をちよと出して子猫の眠りこけ 徳島 光山 咲
 風五月遠まはりしてポストまで 神戸 田中 由子
 廻すほど走れぬ子へも風車 高松 高橋 遥
 畏れつつ撞きし一打の鐘籠 長岡 安井 里子
 先を行く子は吸ひ込まれ山若葉 浜田 三沢 孝子
 崩れさうにも崩れんと夕牡丹 高松 佐保美千子
 往診の医師に牡丹剪りにけり 東京 不破 澄子
 氷室跡訪へば転がる落椿 高岡 北川 越草

生かされて感謝の日日や柏餅 神戸 三木 雅子
 昨日より今日の植田の青さかな 四日市 栗原ひろ子
 我が町のみな普段着の花の径 知多 田辺 澄子
 一陣の風一枚の青田波 武蔵村山 福留 和江
 一貫目ほどの筍解体す 荒尾 大川内みのる
 目に見えぬものと戦ひ夏に入る 姫路 小林 智子
 茄子植えて菜園らしくなつて来し 松山 門田 智子
 一滴を待ちていただく新茶かな 鹿兒島 岡村るみ子
 海鳴りて能登は八十八夜冷 輪島 長徳谷とし
 山を背に海を遙かに袋掛 大分 村上 久子
 若草や絵本読む兎のまるい指 鳥取 砂流 育子
 出来ぬこと増えてゆく日々花は葉に 西予 武知 洋子
 ワクチンを受けし夕べの薄暑かな 南砺 岩城 未知
 うつし世の色変るまで青蛙 加西 前川 和市
 札所へと翁の汲める春の水 鹿兒島 角屋敷昭子

大路より小路に入るや花石榴 鹿兒島 松尾あやめ
 燕来る空濡れ色と思ふとき 東京 庄嶋 里子
 カーネーションことは真つ赤一色の 根室 坂本 知子
 ぼうたんに日傘差しかけ籠りけり 高槻 中家 桂子
 聞いてゐるうちに草笛整ひし 倉敷 中田 鈴江
 夫見舞ふことも叶はず暮の春 郡上 曾我とし子
 はくれんの重たく散りぬ風の中 田辺 細尾 甯代
 鶯の声色いろの空となり 大分 峯戸松祥子
 天地の香の濃くなりて梅雨に入る 坂出 福崎 美紀
 そつと手につかみたくなる若楓 金沢 宮村 啓子
 ゴッホの黄ピカソの青も七変化 岡山 綾野 静恵
 子供の日兜となりぬ新聞紙 長崎 植村 華文
 雨催ひ初咲きの薔薇剪りにけり 鹿兒島 坂本 啓子
 水門を開けて五月の村となる 大分 福嶋ただし
 いづこより水の匂ひや春の月 太宰府 川路 泰子



編集後記

次の通り理事が承認されました。また、後日書面会議で行われた臨時理事会にて業務執行理事として会長、副会長、常務理事も以下の通り決定しましたので、お知らせ致します。

なお、理事の任期は二年間です。

●理事（二十四名 本名・順不同）

荒船昌俊・稲畑廣太郎・稲畑汀子・井上泰至・岩岡中正・岩田公次・岩谷輝雄・大輪靖宏・岡安紀元・小川龍雄・奥山登志行・黒川悦子・介弘紀子・須藤常央・瀬在光本・田中啓信・田丸千種・安部桃子・成田一子・西田潤子・橋田憲明・坊城俊樹・松井秀昭・安田峰

●業務遂行理事

会長（代表理事）／稲畑汀子
副会長／大輪靖宏・岩岡中正
常務理事／稲畑廣太郎・井上泰至・

岡安紀元・小川龍雄

●顧問

稲岡長・伊藤融・駒形隼男・

鈴木和子・安原晃

例年、総会とその後の懇親会での協会賞・花鳥諷詠賞の表彰は、本年も開催できず、表彰状の発送のみ準備しています。来年の総会では三年分の受賞者をご紹介することも検討していますので、来年こそ、ぜひご参集下さい。

花鳥諷詠八月号（通巻第四〇一号）

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年八月一日

発行人 稲畑汀子

発行人 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目八十九

シャンブル笹塚二丁目B-01

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二